

研修旅行の作り方 <その1>

研修における見学の役割

はじめに

研修員受入事業は、開発途上国が抱える様々な課題解決に向け、JICA が実施する技術協力事業の一つで、当該分野の開発の中核を担う人材育成支援の重要な柱である。研修期間は 2 週間程度の短いものから 1 年を超えるものまで様々である。研修カリキュラムもコース目的により視察型、知識習得型、技術習得型まで多様である。

これらの研修において「見学」の割合は異なるが、共通していることは、研修員にとって技術適用の現場を見ることが出来る貴重な機会、ということである。

当社はこれまで JICA 筑波が実施する稲作や野菜栽培に係る人材育成を目的とした技術研修を受託し、また海外技術協力プロジェクトの補完を目的とするカウンターパート研修など、様々な研修の立案、運営、実施に携わってきた。

本シリーズでは、これらの経験をもとに効果的な見学研修を組み立てるポイントを整理し、実施例を紹介していく。

技術習得型研修における「見学」の位置付けと組み立てのポイント

当社が JICA 筑波で実施している受託技術研修において、「見学」には主に三つの役割があると考えられる。

一つは栽培技術など、講義・実習で学んだことが実際の現場でいかに実践されているか、また、どういった工夫がなされているかを学ぶことである。この場合、見学の内容やタイミングを如何に講義や実習とリンクさせるかが大切である。

二つ目は様々なケースを知ることにより、実践へのヒントを得たり、学んだことの理解を深めたりすることである。例えばマーケティングについて基本的な考え方は講義で学ぶことはできるが、その実際は状況によって多様であることから、様々な実例を知ることが重要である。

三つ目は講義・実習では学びきれない現場の取り組みや創意工夫を学ぶことである。例えば農産物の安全性への配慮や 試験場と普及所の連携などに関する生の声を聞くことは、その現場に行かなければ得られない情報である。

これら三つの役割は互いに関係していることから、一つの見学先で複数の目的を網羅することができる。しかしながら研修員にこれらの視点を意識してもらうためには、どう見せ、どう伝えるかを考慮しながら、見学計画を組み立てることが重要と考える。

カウンターパート研修における「見学」の位置付けと組み立てのポイント

カウンターパート(C/P)研修の主たる目的は、C/P が日本の現場を視察し確認した技術などをプロジェクトの現場にその経験を生かすことである。帰国後の活動が明らかにされていることから見学の目的を明確にしやすい。しかし、一般に C/P 研修は数週間程度と、期間が短いことから、限られた時間内で効果的に必要な知見を得られるような工夫が必要となる。そのためにはプロジェクトの活動内容と見学先の特徴の両方を理解した上で、C/P のニーズを満たす、見学先を調整することが大切だと考える。

「見せ方」と「伝え方」

研修先(見学先)として、日本の事例と研修員の国とでは状況がかけ離れていることが多い。したがって、見学先で得た知見を、帰国後に現地でより効果的に活用できるようにするためには、「見せ方」や「伝え方」を工夫する必要がある。

例えば、日本の総合農協や産地システムは高いレベルで完成されていることから、それを見せることにより、自分たちが目指す未来の姿を描くヒントや今後の活動の刺激となる。一方、農民組織や産地化がまだ初期の段階である国からの研修員が対象であれば、完成されたシステムよりも、現在の農協や産地が成り立ってきた歴史的な過程や社会的な背景、その発展に尽力した人々の努力や創意工夫などを伝えた方が有益であることもある。普及システムについても、現在の日本と研修員の国とでは、普及員の役割が大きく異なることがある。この場合、あえて相違点を明確することも一つの見せ方でもあるし、かつての生活改善活動なども含めた戦後日本の発展に果たした普及員の役割を伝えることも有意義である。

このように同じ見学先でも、その「見せ方」と「伝え方」により得られる知見がまるで異なる。したがって、見学を組み立てる際には、研修目的を踏まえ、たうえて、「どの見学先をどう見せるか？」が最も重要な視点となってくる。



キャベツの大産地婦恋村：一面に広がるキャベツ畑はそれだけでもインパクトがあるが、ここをどう見せ、何を伝えるかによって、学べるが変わる。